

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017/2/1 ～2017/2/28)

1. 勉学の状況

これといって書くこともないので、今月はお休み。

2. 生活の状況

【実は芸術の街？デュッセルでオペラ鑑賞してみた】

昨年の某日、Facebook のページを開いてみたら『Oper!』を名乗るグループから招待されていた。メッセージを見てみると「明日の夜 7 時にオペラ座の前に集合で」とか「誰か一緒に行こー」とかドイツ語で言っているのだが、自分にはまるで身に覚えの無い話だったので「ごめん、これ何の話？」と聞いてみたところ、(デュッセルドルフにあるオペラ座に公演を観に行こう!)という企画で、自分はどうやらホストによって間違って誘われたらしい。「当日でもチケットは買えるから行ってみる？」と聞かれたので、この際行ってみることにした。

そして公演当日、オペラ座ということもありちょっと小まじな格好で向かうと、カジュアルなジャケットやタキシード・ドレスを召した妙齡の紳士淑女があちこちに見受けられ、(これちょっと場違いなのでは…?)と思いながらもチケット売り場へ。驚いたことにオペラ座にも学割という仕組みは存在しており(座席は指定できないが)、一枚 10 ユーロでチケットを買うことが出来た。その後他の面子とも合流し、いよいよ劇場内へ。

今回の演目はオッフェンバッハ作『Les Contes d'Hoffmann』(邦題：ホフマン物語)。詩人ホフマンが恋した三人の個性的なヒロイン(機械人形・絶世の美女であり、とんでもない悪女の娼婦・歌姫)と、運命の糸を引く三人の悪魔、そして彼を見守るミューズが織りなす幻想的なストーリーに加え、音楽も最高に充実している、エンターテインメントと芸術性を見事に兼ね備えた、ワクワク感満点のフランスオペラの傑作(※引用元：『フランスオペラの楽しみ』 URL: <http://qqcumb.web.fc2.com/hoffmann.html>)。途中、2 回の休憩を挟みながら 4 時間の公演を行う。休憩の間は食事やお茶をしながら談笑している人が大半だった。私も軽食を購入し食べてみたのだが、流石にオペラ座ということもあり、家庭よりも断然クオリティーの高い料理で非常に満足した。

さて、オペラを見る時におすすめることは、事前の下調べをちゃんとしておくことだ。日本の『劇団四季』のように地方の方言に合わせてセリフを変える、なんていうことは無く、ドイツ公演でもその作品を原文のまま行われる。『Les Contes d'Hoffmann』では演者はフランス語で演技、ステージの上の壁にドイツ語訳のセリフが映し出される、という形式だった。よって予めストーリーを知っておかないと十分にオペラを堪能することが出来ないのだ。逆を言えば、ストー

リーさえ知っていればセリフで何を言っているのかわからなくても楽しめるので、オペラを観に行く時は準備をしておこう。

初めて来てから飽きを感じるまでに一週間とかからなかったこの街で、思わぬ娯楽を発見できたことは個人的に非常に大きく、暇な時間ができたらまた訪れたいと思う。何かの間違いで1週間以上デュッセルドルフに滞在する人にはおすすめの施設であった。

【デュッセルドルフ周辺の都市 第2弾】

今回はクリスマスマーケットの紹介でも触れたエッセンと、NRW 州の北側にある街ミュンスターを紹介していこうと思う。

・エッセン…デュッセルドルフから RE で 30 分くらいで行ける小規模都市。クリスマスマーケットを見終わった帰り、何の気なしに駅の地下に降りてみると、そこはブルーライトでシックな かつこよさを醸し出すホームがあった。あんなにかっこいいホームは他で見たこと無かったので、しばらく眺めて楽しんでいると、世界遺産・ツォルライン炭鉱方面の列車がやって来た。その列車に何故か魅かれるものを感じたので、すっかり夜も更けたというのにツォルライン炭鉱を見て行くことにした。

10~15 分で到着。正面から中に入ると、無骨な鉄骨と煉瓦で造られた巨大な建物や、掘り出した石炭を運び出すベルトコンベアー跡、集めた石炭を他の都市に運ぶための線路跡があり、夜で人がいないということも相まって、まるでロックバンドのミュージックビデオに使われそうな、青少年には堪らないクールさが漂っているのだ。1人で何も考えず、ただただソリッドな雰囲気に関心したい、そんな時はエッセンに行ってみてはどうだろうか。

・ミュンスター…デュッセルドルフから RE で 1 時間半かかる、NRW 州北部の街。駅の周辺をパッと見たところ、恐ろしいほどに見所が無かったので(これは失敗したかな)と思ったのだが、Altstadt(旧市街地)に行ったところで、その疑念は払拭された。両側に建つ真白き壁の建物、ゴミが見当たらない石畳の道路、建物の窓から現れる仄かな光。そう、非常に磨かれた美しさがあるのだ。NRW 州では道路にゴミ・タバコの吸い殻・フン(犬猫だけでなく、たまに人間のもある!)が落ちているのが基本なので、この綺麗さには相当驚いたものだ。その美しさに酔いしれながら歩を進めると、鐘の音を街へ響き渡らす教会があったので、試しに中へ入ってみることにした。するとここもだ。白亜の壁に白亜の天井。しかし、決して人を圧迫する純白ではなく、全ての人を優しく迎え入れる落ち着いたある白い空間に包まれるのだ。今まで見たヨーロッパの美しさとはまた種類のことなる、清廉さとも言うべき美しさに思わず息を飲んでしまった。何がしかの疲れで心を癒したい・穏やかにしたいというときは、ミュンスターを訪れてはいかがだろうか。雪月花に引けを取らない清廉さが、あなた方を迎えてくれることだろう。

【予告：東南欧 26 泊 28 日の旅】

2018 年 1 月某日、2 人の男は部屋でピザを食べながらこんな話をしていた。

A「ねえ、俺春休みに東欧を旅して周ろうと思ってるんだよね」

B「へえ〜、そりやすごい。どこに行こうとしてんの？」

A「チェコとオーストリアとハンガリーかな。あ、後スイスにも行きたい。」

B「それならついでにイタリアもちょっと見て行って、ぐるっと一周する感じで旅したらもっと面白くならん？そのぐらい壮大な旅なら俺も一緒に行きたいなあ。」

A「いいねえ。じゃ、それで行こっか。」

B「そやね〜」

こんな軽い感じのノリから約1ヶ月にも及ぶ旅の企画は始まった。その後、旅行に無理のない径路と行きたい都市の選択、その他諸々の準備を行い旅程が決定した。

◎デュッセルドルフ〜チューリヒ(スイス連邦、またはヘルベチア連邦、5泊6日)〜ミラノ(イタリア共和国、3泊4日)〜ヴェネチア(イタリア共和国、4泊5日)〜ブダペスト(ハンガリー、3泊4日)〜ウィーン(オーストリア共和国、4泊5日)〜プラハ(チェコ共和国、3泊4日)〜ドレスデン(ドイツ連邦共和国、1泊2日、ここで友人とはお別れ)〜ベルリン(ドイツ連邦共和国、3泊4日)〜デュッセルドルフ◎

(ほとんど東欧の方に行つてくない?)というツッコミが多数ある事を執筆段階で予測している私は、「ここでいう東南欧は、あくまでドイツを基準に見たものである」という言い訳を予め差し込んでおくこととする。そんなこんなで夢と浪漫溢れる東南欧26泊28日の旅、来月始動!

A「あれ、お前まだビザ取つて無くね？」

B「!!!!!!」

【東南欧26泊28日の旅：第0話〜翼じゃなくて、ビザをください〜】

そうだった。いつぞやの報告書にも書いたが、シェンゲン協定の規定日数を超えて滞在する人は、ビザを貰っていないと国外に出ることが出来ないのだ。というわけで2月後半のある日の早朝、ビザをもらいに行くことに。様々な人の証言から、ビザには2つのタイプがある事がわかった。1つは日本国のパスポートに必要な情報が書かれた紙を直接貼るシールタイプ、もう1つはパスポートとは別にカードを発行するカードタイプだ。シールタイプのものはその場で支給してくれるし、発行手数料も安い。カードタイプのものだと発行に3週間から1ヶ月かかる上に、発行手数料は少し高くなる。恐ろしいのはどちらかのタイプを自分の好みで選べない事だ。シールタイプが来ることを祈りながら、事務所の中で順番を待つ。待つこと1時間、ようやく順番がやってきた。必要な書類・写真を出し、指紋を機械で採取されたりして、ついにビザがもらえることに。

しかし!しかしである。貰えるのは非運にもカードタイプのビザだった。「スイスとか色々な国に行くから、今ビザを発給してほしい」と言っても、係のお姉さんは残念そうな顔をして首を

横に振る。変わりにお姉さんは「仮ビザを発行しましょう、それなら大丈夫でしょう。」と言って、月曜日に外国人局に来るよう求めた。

週は明けて月曜日、再び外国人局に行って受付で「ドイツを出て旅行するための仮ビザをもらいに来た」と言うと、受付のおじさんは「仮ビザ貰っちゃうと、国外に出られなくなるよ」などと言ってきた。(何を言ってるんだこいつは…)と思いながら、先週のお姉さんとの話をすると「そいつは多分、何も知らないんだろうな」とのたもってきた(※当時の焦りを表現するため、あえて間違った表現を使っています)ので、事務所内の連携の皆無ぶりに笑いながら、結局何も貰うことなく家に帰ってしまった。仕方がないので旅行にはビザの手続きの際に貰った、滞在許可の期限などが書かれている公文書を持って行くことにした。滞在許可の期限は旅行の日程に全て含まれているから、書類さえ持っていれば問題ないだろう、というわけだ。他人事のような呑気さと拭えない不安を抱えた筆者をよそに、時は無慈悲に進んでいく…。

[次話予告] …ビザをその場で貰えなかったことにより、夢と浪漫の他に逮捕・強制送還のスリルが加わった今回の旅。無事国境を越える事は出来るのか、緊張しまくりな筆者と友人を乗せた列車は一路スイスへと向かう。しかし、その先には厳しくつらい現実が待ち受けているのだった。

ネヒステマール
Nächste Mal(ドイツ語で次回)、【東南欧 26 泊 28 日の旅：スイス編第 1 話～まさか、旅立ちの日に～】

次回は【薔薇の月曜日にカーニバル見に行ったら荒廃の世すぎて楽しい】、【東南欧 26 泊 28 日の旅：チューリヒ編第 1 話～まさか、旅立ちの日に～】、について書いていこうかと思います。来月は勉学の状況で書くことがあまり無いと思われるので、生活の状況のテーマ数を増やすかもしれません。